飯田女子短期大学
２０１３年 ８月

FD通信 No. 5

飯田女子短期大学教務（FD）委員会　　http://www.iidawjc.ac.jp

すぐれたカリキュラムといい授業を学生に

教務（FD）委員長　松崎行代

検討を重ねてきた公開授業が、今年度前期より始まりました。初年度は、各学科・専攻ごと２科目の授業の公開と終了後の検討会の実施というかたちを設定し実施しました。この一連の活動を通し委員会では２つのことを目標としました。１つは、参観してもらうこと・参観させてもらうことにより、教員相互が自身の授業を振り返ることで授業運営や教材改善に取り組みいい授業を学生に提供できるようにすること。もう１つは、１つの科目の授業内容を窓口として各教員が自身の担当する科目の授業内容を見直し、学科・専攻のカリキュラムをより有機的なつながりのあるものにすることです。

現在問題となっている「学習成果」には、科目の到達目標レベル・領域別到達目標レベル・学科専攻の教育目標（DP）レベルと複数のレベルが設定されますが、学生主体という観点から教育の改善を進める際には、各学科の修業期間を通した一人の学生のまるごとの育ち、つまり、学科専攻の DP レベルの学習成果獲得が最重視されるべきだと考えます。公開授業において上述した２つの目の目標を設定したのも、こうした理由からです。学生が各科目の位置づけを明確に理解し最終的な目標に向かって意欲的に学習に取り組めるよう、昨年度はシラバスの見直しおよびカリキュラムマップの作成を行いましたが、定期的な見直しや教員同士の意識統一を図ることが必要です。そういった場としての公開授業の位置づけも重要視していきたいと考えました。

最後になりましたが、「いい授業」という言葉を何度か使ってきましたが、「いい授業」とはどんな授業か。まずは、わかりやすいこと、学生が関心を持って主体的に取り組めること、そして大事なのは、最終的に科目の達成目標が全受講生に達成され学習成果が獲得されることではないでしょうか。FD では学生による授業評価も実施していますが、今後委員会では、各先生方がシラバスに明示された評価内容と評価方法によって出された成績（評価結果）を活用した学習成果の見える化に取組み、その結果と授業評価の結果、そして、授業公開などが一連に結びついていくような FD の取組みを展開していきたいと考えています。

FD により本学の教育活動がより良いものになっていくことが、学生にもそして学生が卒業後に活躍する地域にとっても重要であり、それが短大の責務だと言えます。教職員のみなさんの声を取り入れながら、さらに充実した FD 活動を考え実践していきたいと思います。

目次

すぐれたカリキュラムといい授業を学生に	教務（FD）委員長	松崎行代	ページ１
「何を伝えたいか」を振り返る	家政学科家政専攻	坂上ちおり	ページ２
公開授業を終えて	家政学科生活福祉専攻	熊谷　教	
「学生がわかる」というプロセスを客観的にみる大切さ	家政学科家政専攻	三浦弥生	ページ３
公開授業を終えて	家政学科食物栄養専攻	富口由紀子	
公開授業「障害児保育」を終えて	幼児教育学科	齋藤勇紀	ページ４
幼児教育学科公開授業参観と検討会	幼児教育学科	庄司洋江	
立体像が描ける説明力を目指して	看護学科	鈴木真由美	ページ５
覚えるだけの知識から使える知識となるために授業でできること	看護学科	細田せい子	

公開授業を行った先生と授業を参観した先生方に、公開授業を終えての思いや感想を寄せていただきました。これにより、他学科の公開授業の様子を少しでも感じていただければと思います。

「何を伝えたいか」を振り返る

家政学科家政専攻　坂上ちおり

心理学というのは、目にみえない心のしくみを理論化していたり、さまざまな人の行動に共通する法則性を見出して理解するものなのだと思います。「心理学」に関する授業を担当していての難しさは、その心理学の持つ特徴に拠っているかもしれません。

そこで、今回の授業公開にあたり、「学生に抽象的な概念・理論的な概念の理解を促すため、どのような工夫ができるか」という点を見ていただきたいと申し出ていました。いわば「教え方」のような点について御意見をいただけたらと考えていたわけです。

さて、私が授業で大切にしているのは、知識の伝授ではありません。子どもたちに向き合うときの姿勢やスタンスであったり、視点の持ち方を身に付けてほしいと考えています。柔らかに述べれば、「子どもってすごいなぁ」だとか「人っていいよね」との想いを持てること、そして子どもたちや人と関わることを投げ出さない力のようなものを持ってほしいと強く願っているものです。

授業公開を終えて先生方からコメントを頂いたり、こうして原稿を書かせていただくにあたり振り返ってみますと、「教え方」について意見交換することを通して、実は「何を伝えたいか」だとか、「どういう養護教諭になってほしいか」といった像について振り返ったり議論するきっかけに、この授業公開がなっていると感じています。

本学で心理学を教えるようになって５年目を迎えました。「保健室の先生」となった卒業生から、子どもたちとの関わりについて相談を受けることが多くなっています。そのなかで、心理学がはたして教育現場で働く卒業生たちにどのように役に立つだろうか、という点に立って授業を構成していくことの難しさも感じています。今後も、授業公開だけにとどまらず、このような問題意識についても専攻の先生方と一緒に考えていけたらと願っています。

公開授業を終えて

家政学科生活福祉専攻　熊谷　教

生活福祉専攻では今年度当初より公開授業を計画し、前期に 7 回実施しました。従来、実習関連の授業には、実習関係教員が出席してきた経過もあり、学生にとっても特別という雰囲気はなく自然に実施できたと思います。

専攻の教員が行う各授業では共通のワークシートを配布しており、授業の展開もワークシートを振り返ればポイントが理解出来るようにしてきました。このワークシートは事前に各教員にも配布されているので、授業の概要は理解していましたが授業に参加してみると初めて感じることもありました。

授業者としては、授業を見てもらい意見を頂けたことは、大きな収穫でした。というのは実習関連でいつも専攻内の教員には参加して頂いていたのですが、別の科目になると学生の態度や雰囲気も違ってきており、授業展開についての意見を頂けました。また、内容についても他科目との関連から視野を広く捉えないといけないことを感じました。

公開授業にあたり、昨年度末の FD 研修会の内容をもとに専攻で記録用紙が作成され、授業を参観した教員がそれぞれ記録を残し前期終了時に総括を行いました。そこでは授業の目標や到達点をわかりやすく伝えなければいけないこと、テキストの用語の定義を統一しておいたほうが良いこと、授業の課題はより明確なルールを示さなければいけないことなど、授業方法について充実した討議が行えました。
日常の会議では授業方法や「どうしたら良いのか？」と話し合う時間が取れなかったのですが、公開授業を通して討議することが出来て感謝しています。今後、この内容を生かしてより充実した授業にしたいと考えています。

「学生がわかる」というプロセスを客観的にみる大切さ

家政学科家政専攻　三浦弥生

「学生がわかる」ということ。それは私たち教員が短大そして学生から求められる授業に課せられた最低限度の役割であり、それを成し得る力量と技術をもっていることもまた、私たちが彼らから求められる素養のひとつだと思います。しかし、私自身日々の授業の中で「学生がわかる」というプロセスを学生に確実に提供しているのか、というと自信をもってそうは言い難く、仮にそうであるとしても、それは自らの力量のなかだけに収まっており、改めて学生に提供していた授業への無責任さを考えさせられます。

この前期、専攻で行った公開授業を２回参観しました。そして、「学生がわかる」というプロセスを客観的にみることの大切さを強く感じました。

授業の内容ではなく、そのプロセスをみるという過程はとても新鮮で、自分であればどうしただろうか、そういう発問の仕方があるのか、このタイミングでこの媒体を使うと学生の興味を引き出せるのか、などさまざまな発見がありました。また、「学生がわかる」瞬間を目撃すると、そこまでのプロセスに対して何が効果的であったのか客観的に授業構成や展開を考えることができました。公開授業のあとの教員間の意見交換では私自身が気づかなかった点を確認することができ、今後授業をする上でのヒントを得ることができたと思います。

当初、授業を行う技術は教員それぞれの持ち味でよいのではないかとの思いもあり、公開授業に対しては正直抵抗がありました。しかし、「学生がわかる」というプロセスを客観的にみること。「学生がわかる」というプロセスを客観的にみて貰うこと。それは、授業を提供していく自らの力量や技術を磨くこと。つまりは「学生がわかる」ということの保証に繋がって行くのだと感じました。

公開授業を終えて

家政学科食物栄養専攻　富口由紀子

本年度、本学で初めて公開授業が実施され、食物栄養専攻では 3 科目が実施されました。助手という職種柄、普段から先生方の授業を拝見する機会はありますが、改めて公開授業ということで、今回初めて拝見する授業もあり、新たなことを学ぶ良い機会となりました。

2 年生の実習補助を担当することがほとんどである私は、今回、1 年生の実習風景を拝見することで、今まで疑問に思っていたことが少し解消されたように思います。

例えば調理実習。1 年次は、穴埋め書き込み式のプリントを配布し板書をとるよう指導していました。2 年次では、自分でノートを作成するため、板書は学生がそれぞれ行います。これまで、2 年生の調理実習前の講義中、特に板書をせずにいた学生を見ていて疑問を感じてきましたが、今回 1 年生の授業を見学することで、1 年次の習慣から、自分で板書するという作業ができなかったのではないかと想像します。授業を担当する先生が違えば、その進め方ももちろん変わってきます。そこで学生が困惑しないよう、段階的に学生へ指導または補助していくことが大事であると感じました。さらに、教員間で連携して、再度話し合いをしていくことの必要性も感じました。

今回、授業公開後に検討会の場も設けられました。しかし、食物栄養専攻では特に意見交換は行われず、少し残念に思いました。検討会での活発な意見交換があってこその公開授業であると考えるため、再度、実施の意味を考える必要があると感じます。

2 年又は 3 年間という限られた時間の中で有効的に学生を育てていくには、各教員、共通認識をもって日々学生と関わっていくことが重要です。そのために、学校生活の主となる授業において、それぞれ連携しながら授業を展開していくことが重要であると感じます。

公開授業「障害児保育」を終えて

幼児教育学科　齋藤勇紀

保育者を目指す学生が“子どもの障害を理解する”、“個々にあった支援の方法を導き出す”このような力を身に付けるにはどのような学びが効果的かを常に考えている。

試験が終われば忘れてしまう知識ではなく、保育・教育・福祉の現場において活用できる知識を身に付けてもらいたいと考えている。そのためには、行動的で能動的な授業への参加が必要であると考える。そのためアクティブラーニングをとりいれながら、学生が参加、協働し、問題解決を図れる授業内容を提案するように心がけている。

公開授業においては「自閉症スペクトラム障害（以下：ASD）の子どもへのかかわり」がテーマとなった。実際に、ASDの特性や支援方法をプレゼンテーションしたのちに、教員がASDの子どもになりきり、想定される問題行動を示す。学生には実際にかかわりをもってもらい、かかわりの難しさ（うまくいかなさ）を体験してもらう。グループディスカッションを通して、「どんなかかわりが有効か？」を検討してもらい支援に対する課題を解決してもらう。このような体験型の授業を繰り返し行ってきている。

授業公開後の授業評価検討会では、先輩教員から多数のご意見をいただくことができた。今後課題となるのは、①プレゼンテーションの方法、②学生の個々の理解に合わせた目標設定である。障害児保育の授業においてもインクルーシブ教育システムの推進について学生に教授をおこなう。すべての学生が「わかる」「できる」「楽しい」と思えるような教育を実現できるよう、今後も自己研鑽を積んでいきたいと考えることができた。

今回、授業公開の機会をいただき、学科教員からご助言をいただくことがきたことを深く感謝したい。

幼児教育学科公開授業参観と検討会

幼児教育学科　庄司洋江

第１回目、５月 30 日４時限、齊藤勇紀先生による幼児教育学科２年必修授業“障害児保育”に同教員６名、２回目、６月 10 日１時限、松崎行代先生による同学科１年必修授業 “保育原理” （実習のため三分の一欠席）に同教員８名が参観した。授業後の検討会も含め報告する。

両授業者とも声の大きさ、話すスピード、説明や指示の明瞭さなど授業技術もさることながら、授業への熱意が伝わってきた。前回の復習から始まり、説明を聞いたり学生が主体的に体験的に関わることができるグループ討議やロールプレーを試みたりし、授業時間を有効に組み立てた授業と、欠席学生のフォローのため穴埋め形式のプリントを作成し、前半は書き込みと黒板の板書を参考に話を聞き後半はビデオを使用した授業、とそれぞれ授業展開の工夫がみられた。後で戻りやすいなどの理由でパワーポイントを使用しながらも学生の発言に耳を傾け、表情を見て励ましのことばを掛け一緒に考えるといった姿勢やマイク使用時の配慮など好感がもてる授業でもあった。

検討会では、会の目的や目標を確認した後、授業者からねらい等述べてもらい検討に入った。知識の身に付けさせ方について、１コマの授業の分量、類似した内容の授業が続く時間割への指摘などが挙がった。また、実習に入る前の段階での保育現場をイメージさせることの難しさ、授業者自ら撮影する写真やビデオを使用しての教材作り、実習体験者の話を交えて授業を組み立てる必要性について話が及んだ。保育形態など授業内容にも踏み込み、互いに内容の一部確認もできた。

今回教員の教育力を高める一助としての公開授業と検討会であったと同時に、幼児教育学科教員として理解されるべき保育の根幹である授業科目であったこともあり、幾重にも有意義なものとなった。

立体像が描ける説明力を目指して

看護学科　鈴木真由美

公開授業をさせていただいた基礎看護技術論Ⅱは、講義・演習のスタイルをとる授業形態である。「耳にしたことは忘れ、見たことは思いだし、したことは身に付く」という言葉の通り、この科目は、パワーポイントの平面的なスライドだけでは、授業目標には到達できない内容である。よってこの科目では、授業をどの程度立体的にできるのか、そのために説明力をどれだけ高められるかという点に力を注いでいる。学生が、知るレベルから、技術を習得して使うレベルになるまでには、立体的な授業展開は必須である。特に、デモンストレーションは、活字、イラスト、写真で説明されているテキストの技術の方法を立体的に描くための重要な教材となっている。このデモンストレーションは、教員が見せたいと思うところと異なるところが学生の印象に残ってしまうと、教材の意味をなさなくなる。

今回、公開授業の担当者として、デモンストレーションを中心に、学生の立体像が描けるような説明力があったかという観点から他者評価を頂いた。キーワードの強調、発問の内容とタイミング、学生自身の体験を活かす、板書の内容など効果的な説明であったと評価を頂いた。その一方で、説明に時間を要し、授業案通りの時間配分ができなかったことの反省もあった。学生の反応を見ながら、発問を足したり引いたり、学生の誠意ある精一杯の回答を活かしたり修正したりの展開をしていると、どうしても時間は足りない。授業は生き物だが、授業には時間的な制約があり、制約があるからこそ学生も集中して学ぼうとする。今後の説明力向上のためには、制約がある中で、一人でも多くの学生が「ああ、そうか」と腑に落ちる説明ができることを目指したい。公開授業を参観いただきました先生方、貴重なお時間とご意見をありがとうございました。

覚えるだけの知識から使える知識となるために授業でできること
～公開授業（基礎看護技術論Ⅱ 鈴木真由美先生）を参観させていただいて～

看護学科　細田せい子

看護技術の一つ「体位交換」は、簡単に言えば患者さんの「体の位置や向きを変える」その一言で終わる。しかしそこには、解剖学・物理学・様々な疾患について等多くの知識が必要であり、また患者さんの身体に直接触れながらコミュニケーションをとり、安全･安楽も求められる非常に奥深い技術の一つである。その技術を 90 分の中で、看護の学びを始めて間もない学生に知識だけでなく実際に実践できるところを目指し、いかに伝えるか、その授業内容を参観させていただいた。

縦長の広い演習室を、鈴木先生が 60 人以上の学生の間を行き来し、語りかけ発問し、マイクを向け声を引き出す形で、授業は進められた。「何故人は寝返りをうつか？」「自力で寝返りできない方には、どう援助したらよいか？」等の発問に、学生は実体験や学んだ知識を基に必死に考え、答えを出す。それをグループで実演し考え、その後メカニズムを伝えるための板書を交えながらの説明を受け、補助の教員の示す正しい方法を確認し自ら実際に挑戦する。その中で学生達から、「あーわかった。なるほど。」の声が聞こえ、互いに確認する姿が見られる。その反応がないグループには、すかさず補助の教員が入り助言する。この一連の流れをつくるため、学生には事前に当日の授業資料を渡しテキストのどこを予習すれば良いか明確に示し、教員間では授業で目指すこととその方法が事前に確認されている。

テキストのあふれる専門用語に、学生達は閉口してしまいがちである。その状態から、いかに使える知識として具体的にイメージできるまでにつなげられるか。授業構築の悩みどころである。そのヒントとして、毎回の授業の目指すところを明確にした準備と授業中の学生との対話を充実させることの重要性を改めて学ばせていただいた。

平成 25 年度前期　公開授業実施表

今年度前期は以下のような日程で公開授業が行われました。

授業公開者	授業科目	形式	公開日時
家政学科家政専攻			
坂上　ちおり	教育心理学	講義	５／２０（月）４限
田中　洋江	生活造形論	講義	７／５　（金）４限
家政学科生活福祉専攻			
小笠原　京子	介護過程Ⅰ	講義	５／２４（金）２限
小笠原　京子	生活支援技術Ａ	演習	４／１９（金）４限
矢澤　はる美	こころとからだのしくみⅢ	講義	５／８　（水）１限
熊谷　教	社会の理解Ⅱ	講義	４／１８（木）４限
熊谷　教	生活支援技術Ｂ	演習	５／２　（木）３限
太和田　雅美	コミュニケーション技術	講義	５／１３（月）２限
太和田　雅美	生活支援技術Ｄ	演習	７／９　（火）２限
家政学科食物栄養専攻			
友竹浩之・新海シズ	栄養情報処理	実習	６／４　（火）２限
友竹　浩之	調理学実験	実習	６／１４（金）１・２限
川俣　幸一	生理学	演習	６／２４（月）３限
幼児教育学科			
齋藤　勇紀	障害児保育	演習	５／３０（木）４限
松崎　行代	保育原理	講義	６／２５（火）１限
看護学科			
鈴木　真由美	基礎看護技術論Ⅱ	実習	５／１０（金）１限
岩崎　みすず	精神臨床看護論Ⅰ	講義	７／８　（月）４限

編集後記

本年度前期に、初めて FD 委員会が計画していた公開授業が行われました。各学科で 2 教科以上の授業が公開され、その学科の教員が参観しその後検討会を行うことで、授業を行った側も参観した側も大きな学びがあったと思われます。今回原稿をお願いした先生方には大変お手数をおかけしましたが、その学びが書かれており、他学科の教員が読んで参考になると思います。学生の育ちを考えたより良い教育を実現するために、授業の内容・構成を考え見直したりすることを行い、今後も FD に取り組んでいく必要性を感じます。　（文責：北林ちなみ）

飯田女子短期大学 FD 通信 No. 5　（発行日　2013 年 8 月 30 日）　　編集担当　教務委員会
委員長　松崎行代
委　員　岩崎みすず　及川直樹　小笠原京子　北林ちなみ　黒岩長造　近藤民恵　庄司洋江　千裕美　登内芳子
友竹浩之
※FD 通信へのご意見ご感想をお待ちしております。　fd@iidawjc.ac.jp